

子どもとのかかわりを考えるにあたって



児童発達支援センターうさぎ園（京都市児童福祉センター）

改訂版発行日 2022年2月21日

生まれてきたお子さんの耳の聞こえが悪いということがわかり、保護者の方はそれぞれに大変ご心配をされていると思います。特に、周りの方がきこえておられる場合には「聞こえにくい」ということをすぐに理解し共感するのはむずかしいと思います。また、初めての子育ての場合も、より不安が大きいかもしれません。

これから先、どのように育っていくのか、どんな学校に行くことになるのか、補聴器を使ってどのくらい聞こえるようになるのか、ことばが話せるようになるのか、親として何をしてあげればよいのかわからない…。

このように、とても先の見とおしにくい、何から手をつけたら良いのかと不安ばかりが先に立ってしまう日々を過ごしておられる方も多いと思います。

しかし、子どもさんは保護者の方がどのような心境であれ、いつもすべてをゆだねながら愛情を求めています。まずは保護者の方が、少しでも穏やかな落ち着いた気持ちで、お子さんを「かわいい！」と思い、子育てを「楽しい！」と感じながら日々を過ごすことで、少しずつ見えてくるものが増えるのではないかと思います。それがなかなか難しい、と思われる時には、下記にあげた項目を参考にしてみてください。大切なのは「今」の過ごし方なのではないかと思います。

そのうえで、日々のかかわり方の工夫について考えてみましょう。

- 少しだけ先の目標を持つ
- 今すぐ関係のあること以外は、あとで考える
- よく遊び、上手に休む（…子どもが、ではありません！）
- 子どもが好きなことをできるだけたくさん見つける
- 子どもの変化を、毎日ひとつ見つける（できれば…です）

その1 視線をあわせよう

補聴器をつけ始めたばかりで、まだどの程度きこえているのか、補聴器の効果が目に見えてきにくい時期です。こんな時期、子どもの視線に入っていないところから繰り返し呼びかけるよりも、まずは保護者の方が子どもの前に回り、しっかり視線を合わせて声をかけてあげましょう。聴覚障害のある子どもたちにとって「人が好き」「人の表情が気になる」「視線を合わせて人のお話をきく」というようなことを身につけてあげられるかどうか、今後のコミュニケーションの力に何より大きく関与してくることだと言ってよいでしょう。

○ 子どもをひとりにしている時間が多くないですか？

大人の見えないところで一人寝かされていると、子どもにとっては刺激がとても少なく人への興味が薄くなってしまいう可能性もあります。日中は、子どもの視野に保護者の方が入るようにしてあげましょう。



○ 子どもの横や後ろから声かけをしていませんか？

せっかく声をかけていても、その働きかけは子どもにとっても届きにくくなっています。同じ声をかけるなら、とにかく子どもの見えるところにまわりましょう。たとえ声ははっきり届かなくても、保護者の方の「声をかけている姿」を子どもはしっかり確認することができます。



- 子どもが振り向かないと、更に大きな声で呼びかけてしまいませんか？

どのくらい聞こえているんだろう？という思いから、つついこのような声かけをしてしまうことが多いのではないのでしょうか。繰り返すほどに大人の顔はけわしくなってしまいます。やがて子どものきこえの状態がはっきりわかってきたときには、その状況にあわせて呼びかけていけばよいと思いますが、この時期はきこえの反応の確認をくり返すということは控えましょう。



- 大人のペースで、早口ではなしかけていませんか？

視線を合わせながら声をかけるときには、まず子どものゆっくりしたペースに大人のほうが合わせてあげることが大切です。しっかり目があったことを確認してからあやしたり、お話してあげてください。声かけは短くはっきりと、表情豊かにしてあげましょう。

- 物だけを見せていませんか？

子どもの好きなおしゃぶりやおもちゃ、ミルクをあげるときの哺乳瓶など、子どもをあやすときや、これだよ、と伝えたいときに、つつい目の前に物だけを見せてしまうことがあります。子どもはそれを見れば意味はわかるわけですから、欲しければ手を伸ばしてきますが、そこにはそれを渡そうとしている保護者の方とのやり取りは全く存在しません。何かを渡してあげるとき、知らせるあげるときには、物と一緒に必ず顔を見せて声をかけてあげてください。自分のほしいもの、喜ぶものを渡してくれる「人」がいることが大切なのです。



その2 表情豊かに接しよう

まだ、音声を使ってコミュニケーションすることに十分気付いていない子どもにとって、話かける相手の「表情」は、大人が思う以上に大切なものです。

「表情」は子どもの視線と心をひきつけます。それがどのような意味を持つのか、考えてみたいと思います。

子どもが目の前にあるものをじっと見ながら、どんなことを感じているか、目の前で起こったことを、どんな気持ちで受け止めているかを、一番適切に汲み取ってあげることができるのは、いつもそばにいる保護者の方だと思います。

子どもが驚いている、喜んでいる、怖がっている…と感じたら、その気持ちを、そばにいる保護者の方が言葉や身振りとともに、めりはりのある表情を添えて表現してみてください。子どもの気持ちを、目に見える形で返してあげることによって、子どもはその真似をしたり、見ていたもの、やっていたことに、さらに集中したり興味をもったりしながら、次のステップに少しずつ足を進めていくことができます。また、「良いこと、悪いこと」を学ぶのも、初めは保護者の方の表情の変化がきっかけになることが多いのです。

○ 子どもの気持ちに沿って…

「いやだいやだ」「こわいねー」「あっちがいいの？」…今、子どもが感じていると思うことを、表情と声、身振りで表現して返してあげます。そうすることで、子どもは自分の思いを表現する方法を次第に身につけていきます。



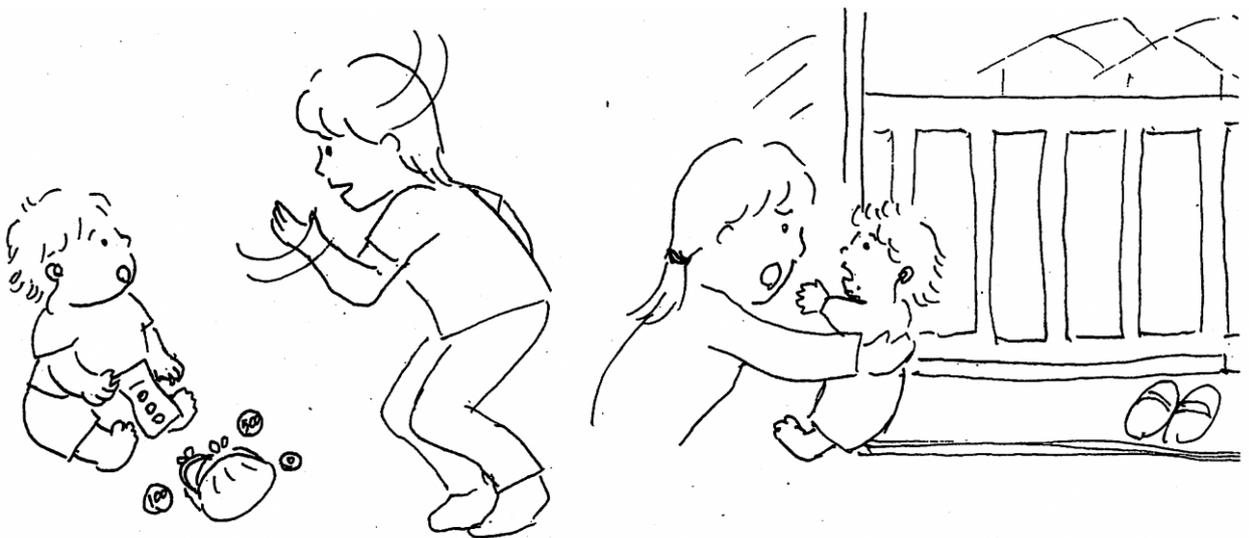
○ 集中して遊ぶきっかけに・・・

子どもが今、大好きなこと、喜ぶこと、興味を持っていることを探してみてください。保護者の方の豊かな表情が、子どもの心をひきつけ、もっと、もっと、という期待する気持ちが育っていくことと思います。



○ 表情で「良いこと、悪いこと」を・・・

まだまだ幼い時期ですから、基本的に危ないものや触ってはいけないものは、手の届くところに置くべきではありません。でも、生活の中でやっていけないこと、止めなくてはならないことが起きたときには、しっかりとわかりやすい表情で伝えてあげてください。



その3 伝え方を工夫しよう

保護者の方から伝えてもらったことが理解できると、子どもは「わかった」という嬉しい気持ちになり、次に何をしたらいいか理解できて安心して過ごせるようになります。そして、伝えてもらうことの大切さを知っていきます。

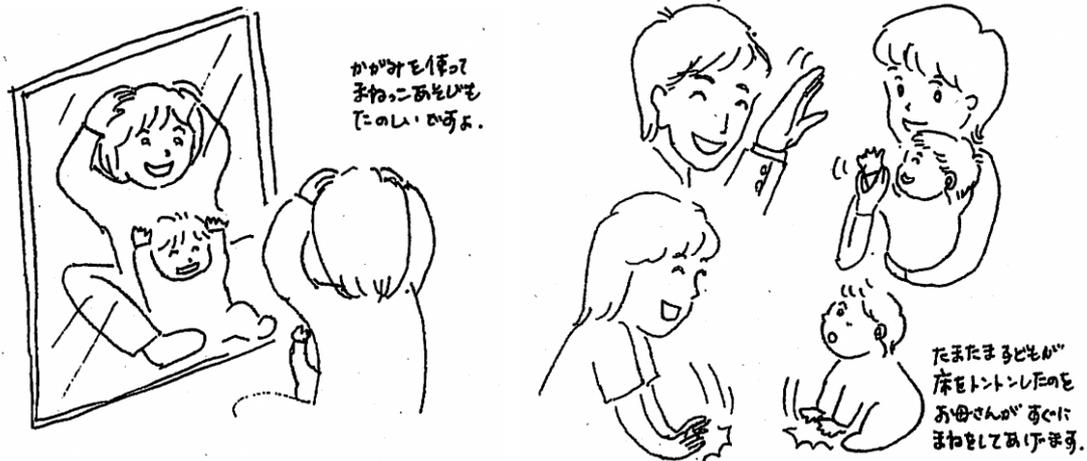
伝えた側の大人も、子どものその様子を見て、もっと伝えてあげたいという気持ちになっていきます。この気持ちが、親子のコミュニケーションが豊かに育つためのエネルギー源となるのです。

少しでも早く、このような体験が積み重なるように、その1、その2、に加えて、日常ご家庭でできるかかわり方をご紹介します。

○ 手話はこの先、子どもにとってとても分かりやすい大切なコミュニケーション手段の一つになっていくでしょうが、幼い子どもにとっておとな向けの手話はすぐに意味と結びつきにくい場合もあります。難聴のない子どもに「食事」ではなく「マンマ」、「ゴミを捨てて」ではなく「ごみ、ポイして」など、イメージや真似のしやすい言い方や言葉を使うのと同じように、きこえにくい子どもにも、見てすぐに理解のできるものをみせながら声をかけたり、真似しやすい簡単な身振りを上手に取り入れて伝えると、とても伝わりやすくなります。また、身振りでコミュニケーションをとることに慣れ、その後の手話の習得にもつながります。



○ 真似をすることは、コミュニケーションが育つ入り口の、大切な段階です。しかし、真似をしない子どもに、無理に真似させることはできません。そんな時、逆に大人が子どものすることを真似て楽しむことで、子どもの興味をひきつけることができる場合があります。あるいは、たまたま真似をしたように見えたことを、「上手ね」と褒めながら、また、大人がそれを真似してみせる…という真似っこあそびも楽しいと思います。



○ 真似っこが楽しめるようであれば、生活の中でいろいろなお手本を大人がたくさん見せてあげてください。遊びのつもりで真似たことが、意味のある身振りにつながっていけば、コミュニケーションが広がります。ご家族や友人の方に手伝ってもらってもいいですね。

